

D.マスランカのサクソフーン作品受容に関する一考察

A Study on the Reception of David Maslanka's Saxophone Works

日下 瑤子
KUSAKA Yoko

キーワード：デイヴィッド・マスランカ、サクソフーン作品、ディスコグラフィ、
Fischhoff National Chamber Music Competition

1. はじめに

アメリカの作曲家デイヴィッド・マスランカDavid Maslanka (1943-2017) は、特に吹奏楽作品で世界的に名が知られており、吹奏楽編成では8曲の長大な交響曲を含む約50曲もの作品がある。またその他には声楽、ピアノ、管弦打楽器の独奏曲や室内楽曲、オーケストラ作品と実に幅広い編成の曲を残し、作品総数は140曲以上にのぼる。中でもサクソフーンのための楽曲は、独奏曲、四重奏曲、協奏曲、チェロやマリimbaとの室内楽曲など様々な編成で14曲あり、サクソフーン奏者たちにとって重要なレパートリーの一つとなっている。

本稿は、彼がサクソフーン奏者たちにどのように知られ委嘱されるようになったのか、そしてどのように受容されて今日に至るのか、その全体像を把握することを目的とする。

彼の作品の大半は委嘱作品であり、筆者はこれまでの研究で特にサクソフーンに関して、「奏者との出会いは、マスランカの音色の志向性や楽器自体の可能性の認識を拡大させていく一因であった¹」と述べた。彼が思い描いた世界をよりリアルに描けるようになっていった背景には多くの奏者たちとの協働が存在するのである。マスランカに2曲を委嘱、2曲を献呈されている雲井雅人は以下のように述べている。

リハーサルのときは厳しかったよ。テンポが少しでも遅いと遅すぎるとか、フォルテ、フォルテッシモは本当の強い音を求められたし、ピアノッシモもそう。フェルマータの長さも足りない。それからブレスマークっていうかカンマがついてるじゃない？あれの意味みたいなのは実際に彼に会って聞かなかったらわかんなかった²。

マスランカは、委嘱作品の初演、CD収録、それに伴うリハーサルなどに立ち合い、奏者たちに楽譜では伝わりきらない意図を伝えてきたことがわかる。

筆者は演奏者として、彼の作品を深く解釈するためには、楽譜に残されたものとともにこれまでに彼が直接奏者たちに伝えてきた言説にアプローチする必要性を感じている。彼と関係性を築いてきた奏者たちの証言は、彼の世界観をよりリアルに表現する一助となるだろう。

彼と関わりのあった奏者たちに迫るためには、彼が作曲家としてどのように活動の幅を広げ、演奏

者たちにどのように受容されてきたのかを整理する必要がある。その上で、そこから浮かび上がった人物に焦点を当てることでよりリアルなマスランカ像を描き、より深い解釈へ迫ることができるのではないだろうか。

本稿では第一に、彼の作品全体の受容の様を考察するため、ディスコグラフィによって量的な分析を、CD批評によって質的な分析を行う。第二にサクソフォン作品に注目し、特に初期の作品の成立情報から委嘱や初演の実態を把握する。また、サクソフォン作品の中では最も多く書かれた四重奏のための作品に注目し、Fischhoff National Chamber Music Competitionでの演奏実態から考察する。

先行研究では、マスランカの一つの楽曲に注目して演奏法を考察したり楽曲分析を行ったりするのが大部分で、著者によるマスランカのインタビューにより作曲プロセスに言及するものが目立つ。サクソフォン作品に関しては2004年にNathan Andrew Keedyが「Sonata for Alto Saxophone and Piano (1988)」、*«Song Book for Alto Saxophone and Marimba (1998)»*、*«Mountain Roads (1997)»*の3作品に限定した楽曲分析³を、2006年にCamille Olinが「Sonata for Alto Saxophone and Piano (1988)」の楽曲分析及び演奏法⁴をまとめている。また筆者は、吹奏楽のための交響曲におけるサクソフォンの使用の検討を通して彼のサクソフォン観⁵について言及したり、サクソフォン四重奏曲を例にしてコラル旋律の引用について⁶考察したりしてきた。これまでの研究では、マスランカ自身の言説に基づく楽曲分析が大半で、雑誌の批評やディスコグラフィ、コンクールでの演奏実態といった事実に基づいた考察は存在しない。

本稿では、彼の作品、特にサクソフォン作品がどのように受容されてきたのかを整理するとともに、彼の音楽を伝播させるきっかけとなった演奏者の存在について言及する。

2. マスランカ作品の受容

2-1. ディスコグラフィ

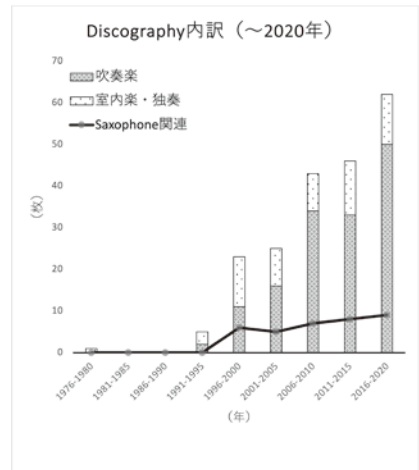
サクソフォン作品の受容について考察する前に、まずはマスランカの作品が全体としてどのように受容されたのかを考察するため、現在⁷までのディスコグラフィの作成を試みる。マスランカの公式ホームページ⁸に掲載されたディスコグラフィでは101枚のCDが確認できるものの、網羅的であるとは言いがたい。そこで、NAXOS MUSIC LIBRARY⁹、Apple Music¹⁰、amazon music¹¹、Spotify¹²、ALL MUSIC¹³、TOWER RECORDS ONLINE¹⁴を基にディスコグラフィの作成を試み、リリース年や演奏形態、演奏者情報から考察した。

その結果、先述のデータベースからマスランカ作品を含む198のCD、LPの存在が確認できた。演奏形態の内訳は、吹奏楽、室内楽、独奏と多岐にわたり、198枚中142枚が吹奏楽、59枚が室内楽及び独奏のCDであった。編成別に見ると、1992年以降、吹奏楽のCD数が増加傾向にあり、室内楽、独奏のCD数はほぼ横ばいとなっている。総数としては、1992年以降増加傾向にある【グラフ①】。

ディスコグラフィから、マスランカ作品が世に知られる基盤となったのは吹奏楽の作品であると言えるだろう。さらに、吹奏楽の演奏団体に注目すると、198の吹奏楽のCDのうち、大半はアメリカの大学の吹奏楽団体によるものであり、そのうちイリノイ州立大学ウインド・シンフォニー（Stephen Steele指揮）が占める割合が最も高く、15枚ものCDをリリースしていることがわかった。アメリカの

大学の他には、アメリカ、日本、ヨーロッパのプロフェッショナル団体、中高生の団体、アマチュア団体によるものも含まれる。コンクールなどのライブ録音CDも数多く含まれ、一般社団法人全日本吹奏楽連盟と朝日新聞社主催の全日本吹奏楽コンクール、全日本アンサンブルコンテスト、アメリカのTexas Music Educators Association¹⁵が主催する大会やMidwest Clinic、World Association for Symphonic Bands and Ensembles¹⁶が主催するWASBE Conference、オランダで開催されるWorld Music Contest¹⁷においてマスランカ作品が演奏されていたことも確認できた。先述した通り、演奏団体はアメリカが圧倒的に多いが、日本（1999、2007、2008、2009、2010、2011、2012、2015、2017、2018、2019、2020）、カナダ（2007）、オーストリア（2012）、スペイン（2014）、オランダ（2014、2016、2017）、スイス（2016、2018）、ベルギー（2017）、ノルウェー（2020）といった各国の団体がCDをリリース、もしくは大会で演奏している。以上のことから、アメリカ以外にも、日本では2000年頃から、ヨーロッパでは2012年頃にはマスランカの吹奏楽曲が知られていたのではないかと考えられる。

グラフ ①



一方、室内楽や独奏のCDは吹奏楽と比べると少ないが、1994年以降コンスタントに発表されている様子が見えてくる。その内訳は多いものからサクソフォーン関連のCDが29枚¹⁸、打楽器13枚、木管5重奏7枚と続き、特にサクソフォーン関連のCD数は1997年以降、少しではあるものの増加傾向にある【グラフ①Saxophone関連参照】。1997年以前にはサクソフォーンの楽曲は「Heaven to Clear When Day Did Close (1981)」、「Sonata for Alto Saxophone and Piano (1988)」の2曲しか作曲されておらず、その両方のCDがそれぞれ1997年に初めてアメリカでリリースされていることを考えると、1980年代にはまだサクソフォーン奏者たちによく知られる存在ではなく、1997年以降、徐々に受容されていた可能性が考えられる。

国別で見るとサクソフォーン関連のCDの演奏団体は、アメリカ24、日本10、スペイン1となっている。中でも最も多くマスランカ作品を収録しているのは日本の雲井雅人であり、7枚のCDがある。日本では、2002年に雲井雅人サクソ四重奏団のCDがリリースされて以来、CDのリリースや大会での演奏が確認できたため、これ以降に日本でマスランカのサクソフォーン作品が知られていった可能性が考えられるだろう。また、打楽器関連ではアメリカの他、1998年にイスラエル、2000年にポーランド、2004年、2014年にドイツ、2005年にスウェーデンの個人、団体によってCDがリリースされている。ヨーロッパの演奏団体による吹奏楽のCDは先に述べたように2012年頃から増加傾向にあることを考えると、これらの国では吹奏楽に先行して打楽器奏者たちの間でマスランカの曲が知られていた可能性がある。

以上のことから、マスランカ作品は吹奏楽を通してアメリカだけではなく日本、ヨーロッパへと広がりを見せていた様子がうかがえる。吹奏楽の演奏団体の大半がアメリカの大学であったことから、アメリカの大学を中心とした吹奏楽のフィールドから年を経るごとに様々な学校団体、国などへ伝播し

ていったと言えるだろう。

2-2. *Fanfare – The Magazine for Serious Record Collectors*

2-1. では、ディスコグラフィの量的な分析を行い、マスランカ作品がアメリカの大学の吹奏楽団体に端を発して受容されていった様を考察した。2-2. では、アメリカの音楽雑誌 *Fanfare – The Magazine for Serious Record Collectors* のCD、LD批評を基にマスランカ音楽がアメリカでどのように評価されたのかという質的考察を加え、より詳細な受容の実態を把握する。*Fanfare – The Magazine for Serious Record Collectors* (以下*Fanfare*と表記する) は1977年9月に創刊され、現在も隔月で刊行されているアメリカのレコード批評雑誌である。マスランカの生きた年代を全て含み、多くのクラシック音楽のレコードを扱っている雑誌はこの他に確認できないため本研究の考察に用いることとする。

*Fanfare*の記事は、Feature Article (特集記事)、Classical Recordings (クラシック音楽)、Collections (コレクション) のカテゴリーに分けられており、さらにCollectionsは、7つに分類¹⁹されている。全体として、特にClassical Recordingsのカテゴリーに多くのページが割かれ、作曲家ごとにディスク批評が載せられている。

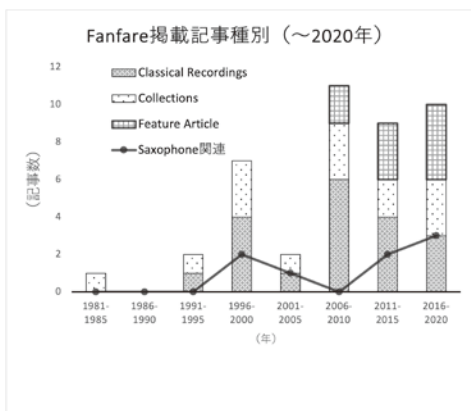
初めてマスランカ作品の批評が掲載されたのは、1982年1月／2月号 (Collections-Miscellaneousのカテゴリー) であり、1980年にリリースされた「Three Pieces for Clarinet and Piano (1975)」を含むLPレコードの批評が以下のように掲載された。

デイヴィッド・マスランカの「Three Pieces」はさらに印象的だ。第2曲では、クラリネットが苦しうに泣き叫び、ピアノが無表情に容赦なく前へ進む。全体を通して調性の変化(しばしば崩壊寸前である)は、よりはっきりとした無調の部分にすり寄せられ、最後に解決する。また、嬰ハ長調の解決はこれ以前の音楽(コードは、この曲の長さをまとめるにはメロディー的に陳腐すぎる)を考えるとかなりしっくりこないように思えるが、全体としては聴き手を惹きつけ、聴くかがある。この曲を委嘱した奏者による演奏は、期待通り素晴らしかった²⁰。

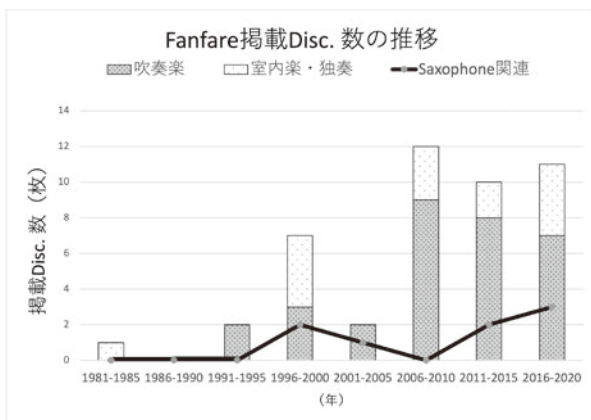
「しっくりこないように思える」といった風に一部批判的に捉えられているようにも思えるが、概ね好意的に受け取られている。そして10年後、1992年4月／5月号 (Collections-Ensembleのカテゴリー) に「A Child's Garden of Dreams (1981)」を含むCDの批評が掲載されて以降、記事数を増し、2020年までに43の記事が掲載された【グラフ②】。また、2009年以降には、Feature Article (特集記事)にも取り上げられるようになっていった。尚、掲載されているCD、LPの大半が吹奏楽である【グラフ③】。

批評の内容に注目すると、1982年から1999年の批評からは、批評者がマスランカ音楽に初めて出会い、その印象を言語化する様が見えてくる。

グラフ ②



グラフ ③



私にとって初めて出会う作曲家、デイヴィッド・マスランカ（1943年生まれ）は、吹奏楽のために、魅力的で革新的な作品を書いた²¹。

*Fanfare*15巻4号の中で述べたように、私は彼の«A Child's Garden of Dreams»が「吹奏楽のための魅力的で革新的な作品」であると知った。[……] マスランカは、吹奏楽からブルックナーのような深い響きを得ており、彼の5楽章15分からなる交響曲はオーストリアの作曲家を漠然と思い起こさせる。[……] 音楽は保守的で、ソナタ形式ではっきりとした調性をもつ傾向があるが、かなり個性的である²²。

この情報 [引用者注：マスランカの学歴] から、彼は吹奏楽のための音楽を専門にしていることがわかる。彼の大胆で大変素晴らしい交響曲第2番を聴いた後、私は弦楽器奏者として、ひどく疎外感を味わう。これは、パワーと色彩の音楽であり、調性音楽の伝統の中で臆することなく、洗練された、しばしば明らかな想像力によって進められていく。シェーンベルクと彼の生徒たちによる十二音技法に実際に親しんでいるものとして、私はマスランカの交響曲第2番での彼の語法が高いレベルで説得力があると感じる²³。

以上の批評では、ブルックナーやシェーンベルクといった作曲家を引き合いに出しながらマスランカの独自性に言及している。2000年以前には、マスランカ音楽そのものの評価が主であり、作曲家としての立ち位置に関する言及は見られない。しかし2002年以降、批評の中に吹奏楽作曲家としてのマスランカの評価に関する記述が目立つようになる。2000年以降の彼の評価に関する記述を以下に挙げる。

デイヴィッド・マスランカ（1943年生まれ）はモンタナに暮らしている間に、吹奏楽の作曲家として確固たる名声を築いてきた²⁴。

デイヴィッド・マスランカの音楽に触れるのはこれが初めてだが、彼の名前は以前からよく知っているし、今日彼が最も多作で広く演奏されている吹奏楽の作曲家の一人であることも知っている²⁵。

1982年、マスランカは壮大な「A Child's Garden of Dreams」で吹奏楽界にセンセーションを巻き起こした。その5年後には、ほぼ同様に優れた交響曲第2番を発表し、それ以来、吹奏楽のための作品を次々と発表してきた。[……] 彼の作品は何千回も上演され、何度も録音されている。実際、この25年間、吹奏楽コミュニティにこれほど熱烈に受け入れられた作曲家は他にいない²⁶。

デイヴィッド・マスランカ（1943年生まれ）は、標準的な管弦楽曲の長さや複雑さと比較しても、吹奏楽のための交響曲の作曲家として、事実上ユニークな位置を確立している²⁷。

多作のデイヴィッド・マスランカ（1943年生まれ）は、8つの交響曲やミサなど、管弦楽の主要作品に匹敵する吹奏楽曲を意欲的に作曲して注目を集めている²⁸。

マスランカはおそらく、現在活動している作曲家と同様に吹奏楽界でよく知られており、彼の音楽は大学レベル以上のほとんどのバンドのレパートリーの定番となっている²⁹。

マスランカの音楽語法はこのCDの作品の中で最も保守的だが、彼は吹奏楽のために非常に効果的に書く方法を知っており、彼が頻繁に委嘱され、彼の音楽が広く演奏されていることは驚くべきことではない³⁰。

吹奏楽界での名声の高さから、デイヴィッド・マスランカはここにいる他の作曲家よりも*Fantfare*の読者によく知られているようだ³¹。

デイヴィッド・マスランカ（1943年生まれ）は、演奏の長さや複雑さでライバルであるオーケストラに対抗しようとする吹奏楽のための長編交響曲で名を成している³²。

デイヴィッド・マスランカの音楽は吹奏楽レパートリーの定番となり、多くの作品が幅広く演奏されている³³。

上記の批評にある「モンタナに暮らしている間」とは1990年にニューヨークでの大学教員の仕事を辞してから、モンタナに移住しフリーランスの作曲家としての活動を始めたことを指しており、1990年代にマスランカが受容されていったことが示唆されている。

また以上の批評から、マスランカは、1982年の「A Child's Garden of Dreams」の発表が一つの契機となり受容されていったことがうかがえる。先述したように最も高い割合で15枚ものCDをリリースし、受容に大きく貢献したイリノイ州立大学ウインド・シンフォニーの指揮者であったStephen Steeleがマスランカ作品を初めて聴いたのもノースウェスタン大学が1985年の秋に収録した「A Child's Garden of Dreams」を聴いたときだと述べており、この曲が受容の一端を担っていると言えるだろう。

デイヴィッドの音楽を初めて聴いたのは、ノースウェスタン大学が1985年の秋に収録した「A Child's Garden of Dreams」を聴いたときである。1986年の春にアリゾナ大学ウィンドアンサンブルでこの曲を選曲した。音楽によって、新鮮で力強い感情が湧き起こされたことを鮮明に覚えている³⁴。

マスランカは、1990年にモンタナに移住しフリーランスの作曲家に転身したことも相まって徐々に知られていき、2000年代にはアメリカの吹奏楽作曲家として受容されたことがわかる。また、2000年代のアメリカでは彼の吹奏楽作品がオーケストラに匹敵する作品として評価されていたこと、吹奏楽のレパートリーとして確立し、多くの演奏団体に演奏されるようになっていたことが読み取れる。

3. サクソフォーン作品の受容

これまでにディスコグラフィ及びCD、LPの批評の検討を通して、マスランカは吹奏楽作品によって受容されてきたことを確認できた。彼の作品は147曲中57曲が吹奏楽作品であり、そのほとんどが委嘱作品である。同じ委嘱者からの委嘱やコンソーシアムにより多くの団体に関わる委嘱も多く、彼が吹奏楽の作曲家として評価されていたことがうかがえる。

一方、サクソフォーン作品に関しては、1980年代にはまだアメリカのサクソフォーン奏者たちによく知られる存在ではなく、1997年以降、徐々に受容されていった可能性があると先述した。マスランカのサクソフォーン作品は14作品あり、これは全作品の約1割にあたる。彼のサクソフォーン作品のうち、North American Saxophone Allianceの委嘱により1988年のコンペティションのために作曲された「Sonata for Alto Saxophone and Piano (1988)」は、2012年の同コンペティションのファイナル審査選択曲、2013年にスロヴェニアで行われたInternational Saxophone Competitionのセミファイナル審査選択曲、第37回日本管打楽器コンクール第二次予選選択曲として選ばれている。また、彼の四重奏曲は、North American Saxophone AllianceのカンファレンスやWorld Saxophone Congressでも度々演奏されており、サクソフォーンのレパートリーとして確立されてきた。吹奏楽の作曲家として知られていったマスランカであったが、それとともにサクソフォーン奏者たちにも彼の作品は受容されていったのである。サクソフォーン奏者たちはいつ、どのようにして彼の作品に出会い、何に惹かれて演奏するようになっていったのであろうか。

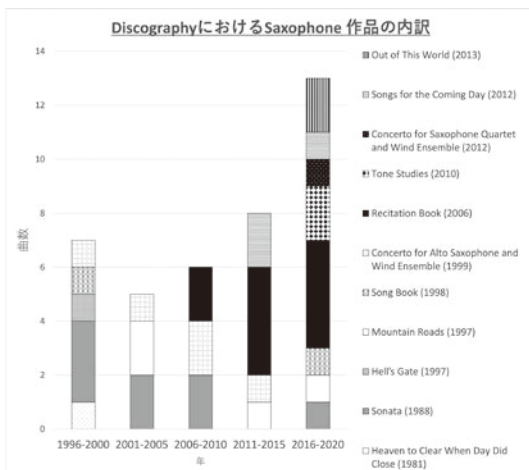
3-1. ディスコグラフィとサクソフォーン初期作品の成立

ディスコグラフィからは、サクソフォーン関連のCD、LPが35枚確認できた。多数録音されている曲は、「Recitation Book (2006)」10枚、「Sonata for Alto Saxophone and Piano (1988)」8枚、「Concerto for Alto Saxophone and Wind Ensemble (1999)」5枚、「Mountain Roads (1997)」4枚と続く【グラフ④】。1997年にアメリカで初めてCDがリリースされた後、その数は増加傾向にある。

初めてサクソフォーン作品が収められたCDは、1997年にイーストマン音楽学校がリリースした*Eastman American Music Series Vol. 2*であり、その中にテナーサクソフォーンと弦楽四重奏のための「Heaven to Clear When Day Did Close (1981)」が収録されている。この曲は、1983年2月26日に録音されており、以下のようにアメリカ音楽の革新と探究を記録するCDの中の一曲として残された。

1924年にハワード・ハンソンがディレクターに任命されて以来、一貫してイーストマン音楽学校はアメリカ音楽の革新を象徴してきた。ハンソン時代は、アメリカ音楽の概念を確立したジャンルの一貫性を特徴とするが、その後の世代のイーストマンの指導者や作曲家は表現手段の多様性を促した。この録音は、後の世代がアメリカ音楽を探究し発見してきた様をよく示している³⁵。

グラフ ④



1983年録音当時には、サクソフォーン作品はこの1曲しかなかったことから、彼の存在がサクソフォーン奏者たちに知られていたとは考えにくい。

また、以下のように、マスランカ自身が委嘱者に関してほとんど記憶していない。

[交響曲第2番の] 次にとりかかったのは、頼まれて書いたテナーサクソフォーンと弦楽四重奏のためのやや謎めかしい作品だ。私は委嘱した人の名前さえ覚えていないが、誰かがニューヨークに訪ねてきて、そのような作品を書いて欲しいと頼んだのだ。もっとも、私は作曲したがそれ以上その人と連絡をとっていない³⁶。

次にリリースされたのは1997年にサクソフォーン奏者Jamal Rossiによる*Relentless*で、「Sonata for Alto Saxophone and Piano(1988)」が収録されている。この曲は、North American Saxophone Allianceの委嘱により1988年のコンペティション³⁷の最終審査のための課題曲として作曲された。1997年にリリースされた後、1998年、2000年³⁸、2001年、2002年、2006年に2枚、2018年と多くのサクソフォーン奏者たちによって録音されている。しかし、多くの奏者たちが参加したであろうコンペティションのために委嘱されたにもかかわらず、作曲から約10年、CDがリリースされてこなかったのはなぜだろうか。審査員としても立ち会っていたというマスランカは、当時の状況について以下のように述べている。

このコンクール優勝者によるソナタ初演のイベントは、ジャズの演奏直後、夕食の直前に予定されていた。しかも、ジャズの演奏は定刻をほぼ1時間過ぎて行われた。そして、だいたい午後5時に始まるイベントが残っていて、人々は夕食に行くためにばらばらと移動していた。このようなことから、この作品の初演は約20人の聴衆のもとで行われた。そのため、このソナタがサクソフォーン奏者の心に何らかの形で収まるのに長い時間がかかった。しかし、その初演にアップルトン出身のSteven Jordheimが立ち会っていた。彼はすぐにその作品に惹かれ、取り上げたので、彼はこの作品をプッシュした人の一人と言える。彼はそれを非常に良い緊張感で録音した。それには数年かかった。彼は最初に作品の録音を試みたが、録音の品質があまり良くななくうまくいかなかったのだ。費やした労力により彼は疲れてしまい、

しばらく作品をしまいこみ、その後、別のピアニストと別のレコーディングエンジニアと一緒に、素晴らしい仕事をした。その時点から、作品は受け入れられて成長し始めたが、かなりの時間がかかった³⁹。

マスランカが述べているように、1989年の初演時に観客として立ち会っていた人数が少なかった上に、演奏に高い技術を要するためになかなかサクソフォン奏者たちに演奏されなかったことがわかる。1997年にCDをリリースしたJamal Rossiがどのような経緯でこの曲を知ったのかは現在のところ不明だが、1998年にリリースしたKenneth Tseは以下のように述べている。

私は、大学の学位取得を目指していたときにマスランカ作曲のソナタを録音した。とても表情豊かで感情に訴える力のある作品だと思った！私の演奏スタイルに合っていると思う。私のCDはこの作品の2番目の録音だった。最初の録音は、アメリカ人のサクソフォン奏者、Steven Jordheimによるものだった。このとき、私もデイヴィッド・マスランカを知ることができ光栄だったし、私の録音について電話でたくさん話をした。他の録音があまりなかったので、私が録音する以前にどこでその曲を聞いたかどうか覚えていない！⁴⁰

このことからKenneth Tseは、1997年のJamal Rossiの録音の存在を知らずに録音に臨んだことがわかる。また1993年に収録され2000年にリリースされたSteven Jordheimの録音を最初の録音と述べていることから1993年に収録された音源を何らかの経緯で入手し、聴いていた可能性が考えられる。

Kenneth Tseとマスランカの言葉から、Steven Jordheimがこの曲を広めるきっかけの一人となっていたと言えるのではないだろうか。Steven Jordheimが「Sonata for Alto Saxophone and Piano」を録音したのはNorth American Saxophone Allianceのコンペティションでの初演から4年後の1993年、CDをリリースしたのは、11年後の2000年であった。2000年のCDには、1993年6月に収録した「Sonata for Alto Saxophone and Piano」と、彼が委嘱し1999年12月に収録したアルトサクソフォンとマリimbaのための「Song Book (1998)」⁴¹が収められている。Steven Jordheimは「ソナタのときに彼の指導も受け、個人的なやりとりもあった⁴²」と述べており、マスランカ本人とやりとりをしながら録音し、次の委嘱に至ったことがわかる。

このように2000年以前の時期は、マスランカのサクソフォン作品が奏者たちに少しずつ知られるようになっていた時期であるとも言えるだろう。

3-2. サクソフォン四重奏作品

ディスコグラフィからマスランカ作品をリリースしている奏者に注目すると、サクソフォン四重奏に関わる奏者たちにある共通点が見えてくる。コンクールのライブ録音を除くサクソフォン四重奏のCDは13あり、そのうち5つは委嘱者によるものである。さらに、アメリカの四重奏団の演奏実績を調査すると、7つの四重奏団のうち4団体がリリースの1年から2年前に同じ曲を含むプログラムでFischhoff National Chamber Music Competitionに出場し、管楽器部門シニアの部にてゴールドメダルを獲得している【表①】。

ここからは、Fischhoff National Chamber Music Competitionにおけるマスランカのサクソフォーン四重奏作品の演奏状況の調査から、彼のサクソフォーン作品の受容について考察する。

彼のサクソフォーン四重奏曲は5曲あり⁴³「Mountain Roads (1997)」はTranscontinental Saxophone Quartetに、「Recitation Book (2006)」、「Songs for the Coming Day (2012)」は雲井雅人サクソ四重奏団により委嘱、他2曲はマスランカから雲井雅人サクソ四重奏団に献呈されている。

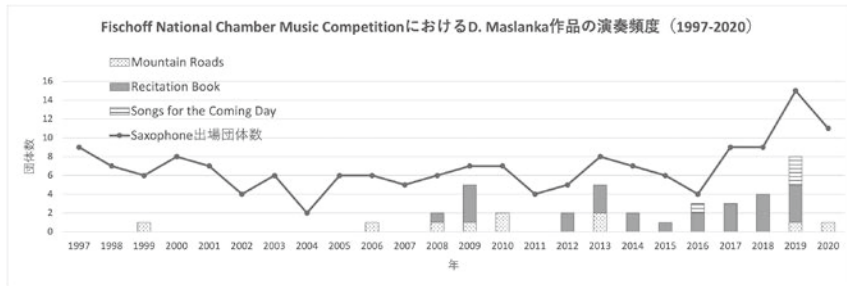
表① David MaslankaのDiscographyにおけるサクソフォーン四重奏作品

カタログ番号	レーベル	発売年	タイトル	演奏者	曲①	委嘱 団体	Fischhoff
TROY412	Albany	2001	Mountain Roads	Transcontinental Saxophone Quartet	U. S. Mountain Roads	○	
CACG-0039	CAFUA	2002	デイヴィッド・マズランカ マウンテン・ロード	雲井雅人サクソ四重奏団	Japan Mountain Roads	○	
CACG-0108	CAFUA	2008	デイヴィッド・マズランカ レシテーション・ブック	雲井雅人サクソ四重奏団	Japan Recitation Book	○	
/	CDBY	2010	Back Burner	Red Line Saxophone Quartet	U. S. Recitation Book		2009
TYCE85001	Universal Music	2013	David Maslanka: Songs for the Coming Day	雲井雅人サクソ四重奏団	Japan Songs for the Coming Day	○	
Edition 9	OUTRA+OUTRA	2014	Recitation Book	Cuarteto Skirion	ESP Recitation Book		
/	Barkada Quartet	2014	Aventura	Barkada Saxophone Quartet	U. S. Recitation Book		2012
BG319	Blue Griffin Recording	2014	Into Xylonia	Iridium Quartet	U. S. Recitation Book		
/	Syzygy Saxophone Quartet	2015	Songs for the Coming Day	Syzygy Quartet	U. S. Songs for the Coming Day		
/	Mirasol Quartet	2017	Four Four	Mirasol Quartet	U. S. Recitation Book		2015
RR8010	Ravello Records	2019	Migration	Fuego Quartet	U. S. Recitation Book		2017
NAT18501	Studio N. A. T	2019	Adam!	アダム・サクソフォン四重奏	Japan Recitation Book V.		
CACG-0302	CAFUA	2020	雲井雅人サクソ四重奏団ベスト	雲井雅人サクソ四重奏団	Japan Mountain Roads Recitation Book	○	

今日、アメリカ最大規模で、歴史のある室内楽コンクールFischhoff National Chamber Music Competitionには多くのサクソフォーン奏者たちが参加している⁴⁴。本稿では、マスランカが初めての四重奏曲を発表した1997年から2020年現在までの間、演奏審査に出場した164の団体が演奏した774曲を抽出した。この774曲は実に多様で、ガブリエル・ピエルネ作曲《民謡風ロンドの主題による序奏と変奏》(1930)、ウジェーヌ・ジョゼフ・ボザ作曲《アンダンテとスケルツォ》(1943)、ジャン・リヴィエ作曲《グラヴェとプレスト》(1983)といったフランスの作曲家によるサクソフォーンの伝統的レパートリーからフランク・ティケリ作曲《バックバーナー》(1989)、ラッセル・ベック作曲《ドラステイック・メジャーズ》(1976)、ウィリアム・オルブライト作曲《ファンタジー・エチュード》(2009)などアメリカの作曲家による作品まで、多様なプログラミングがなされていた。

164の演奏団体のうち、マスランカ作品をプログラミングしたのは79団体で、内訳は、「Recitation Book (2006)」26団体、「Mountain Roads (1997)」10団体、「Songs for the Coming Day (2012)」4団体となっている【グラフ⑤】。

グラフ ⑤



初めてマスランカの曲が取り上げられたのは1999年。ノースウェスタン大学のMehke Consort⁴⁵が「Mountain Roads (1997)」を演奏した。メンバーの一人であった佐藤渉は選曲に関して以下のように述べている。

佐藤：ノースウェスタンにいたとき、98年から99年の間にFischoffという室内楽のコンクールに出ることになって、カルテットで。カルテットのメンバーの一人、モルガン [……] が直接のマスランカの知り合いで、モンタナの出身だったんだけど、その人の推薦でその曲をやることになった。

日下：この人は直接の知り合いということですが、どんな知り合いだったのですか？

佐藤：よくわからない。でも直接知っていると言っていたので、家がよっぽど近かったのかな？

日下：その他のメンバーはマスランカのことを知っていたのですか？

佐藤：知らなかった。僕も含めて3人。

メンバーの一人がマスランカの知り合いであったために紹介されたが、他のメンバーはマスランカのことを知らなかったことがわかる。Mehke Consortが演奏した1999年までにマスランカのサクソフォーン関連作品は4曲⁴⁶あった。そのうちの「Sonata for Alto Saxophone and Piano (1988)」は、今でこそコンクールの課題曲となり、CDが多くリリースされているが、1997年までは録音も存在しなかったのである。1999年は、吹奏楽で少しずつ知られていたことは確認できているが、サクソフォーン奏者たちにはまだ知られた存在ではなかったのではないだろうか。

話をFischoff National Chamber Music Competitionに戻すと、マスランカ作品は2008年以降に演奏頻度が高くなり、出演団体の約半数がマスランカ作品を取り上げるようになる。この背景には、2007年にアメリカの5つの大学で行われた「Recitation Book (2006)」の世界初演ツアーの影響が少なからずあると考えられる。「Recitation Book」を委嘱した雲井雅人サクソ四重奏団は、2007年4月13日にノースウェスタン大学でマスランカ臨席のもと世界初演を行っている。さらに4月15日にイーストマン音楽院、4月17日ニューヨーク州立大学ポツダム校クレーン音楽学校、4月18日シンシナティ音楽院、4月19日インディアナ大学と立て続けに「Recitation Book」を含むプログラムで演奏会を開催した。その後2008年に初めて「Recitation Book」がFischoffで演奏されたのだ。演奏したのは、ノースウェスタン大学のAmethyst Quartet⁴⁷である。彼らのメンバーの一人、Sean Hurlburtは当時の状況について以下のように述べている。

Amethyst Quartetのメンバーは、雲井雅人サククス四重奏団の大ファンである。2005年に私たちが一番気に入っていたアルバムは、雲井雅人サククス四重奏団の「Mountain Roads」だった。私たちは、雲井雅人サククス四重奏団が2006年から2007年にノースウェスタン大学を訪れたとき、「Recitation Book」の初演を聴いた。それは素晴らしかったので、私たちはその場で、その作品でコンクールに参加したいと思った。彼らが録音をリリースする前に、私たちは初演を聴いたかもしれない。どちらが先かよく覚えていない。いずれにせよ、私たちは雲井雅人サククス四重奏団が大好きで、彼らのマスランカとバッハの演奏が大好きだった⁴⁸。

雲井雅人サククス四重奏団の初演ツアーは、「Recitation Book」を奏者たちに広めるきっかけの一つであったのだろう。

Fischhoff National Chamber Music Competitionにおける四重奏曲の演奏状況の調査から、サクソフーン四重奏曲では「Recitation Book」が作曲された2006年頃から特に多くの団体に演奏されていく様子が確認できた。多くの奏者たちが参加する大会で演奏されることで奏者の間で広がり、大会での演奏がきっかけでCDがリリースされるといった要因が相まって徐々にマスランカ作品が受容されていったと考えられる。2019年のFuego QuartetのCD、「Migration」の批評の中で作曲家のDavid DeBoor Canfieldは以下のように述べている。

今日では、弦楽四重奏と同じくらいたくさんのサクソフーン四重奏があり、私は様々なサクソフーンの大会でかなりの数の四重奏を聞いた。(一作曲家としてであって、私はサクソフーン奏者ではない)[……] この四重奏団のリサイタルでは3つの作品を演奏していて、そのうち最初の2つ [マスランカ作曲「Recitation Book」とオルブライト作曲「Fantasy Etude」] は以前聴いたことがあり、かなり広く演奏されている(そのように私は信じている)⁴⁹。

サクソフーン作品が初めて書かれた1981年から時を経て、「Recitation Book」が書かれた2006年以降にはマスランカ作品がレパートリーとして奏者たちに浸透してきた。その後、上記批評からも読み取れるように2019年にはマスランカの作品が広く演奏されていると言えるだろう。

4. まとめ

マスランカ作品は、1982年の吹奏楽作品「A Child's Garden of Dreams」の発表がきっかけとなり、1990年にモンタナでフリーランス作曲家としての生活をスタートさせた時期を経て徐々に知られていくこととなった。そして、2000年代にはアメリカの吹奏楽作曲家として受容され、オーケストラ作品に匹敵する吹奏楽作品の作曲家として認められる存在であったことが明らかとなった。サクソフーン作品は、少し時期は遅れるが、2006年頃からサクソフーン奏者たちに受容されていき、現在までに多くのサクソフーン奏者たちに演奏されている。

また、受容の考察を通して、マスランカと深く関わり、受容の一端を担った奏者の存在が浮かび上がってきた。吹奏楽では、多くのCDをリリースしたイリノイ州立大学ウインド・シンフォニーと指揮

者のStephen Steeleの存在は彼の受容を支える存在であったに違いない。

指揮者のStephen Steeleは、マスランカ音楽の優れた第一人者であり、一流の表現者として頭角を現し、彼の交響曲8曲のうち5曲とその他多数の作品を録音した。マスランカ自身が両方のディスク⁵⁰のプロデューサーを務めている以上、これらの演奏は権威あるものと思わざるを得ない。この演奏は息をのむように素晴らしいもので、豊かで広大で、非常に幅広いダイナミックレンジをもち、細部まで鮮やかである⁵¹。

また、サクソフォーン作品ではマスランカに2曲委嘱、2曲を献呈され、7枚のCDに関わった雲井雅人の存在があった。特に雲井雅人サクソ四重奏団により行われた「Recitation Book」の初演及びその後のアメリカ演奏ツアーによるサクソフォーン奏者たちへの影響の可能性が示され、彼らがマスランカ作品の受容の一端を担っていたと言えるだろう。

筆者は、「一人ひとりの演奏者との関わりが彼の楽器に対する可能性の認識を広げ、彼の作品に少なからず影響を与えてきた⁵²」と述べた。演奏者の存在が彼の音楽に影響を与えたように、彼の作品が奏者に影響を与え、マスランカ作品の受容につながってきたのであろう。

本稿ではディスコグラフィとその批評、Fischhoff National Chamber Music Competitionでの演奏実態の分析からサクソフォーン作品の受容に関して考察してきた。しかし、室内楽コンクールのデータを分析に用いているため、四重奏以外の作品に関する考察は十分とは言えない。特に、1988年にNorth American Saxophone Allianceから委嘱された「Sonata for Alto Saxophone and Piano」の受容の実態は不明な点が多い。今後はNorth American Saxophone Allianceとマスランカ作品の関わりについてさらに調査を続け、サクソフォーン作品の受容の実態についてさらに詳細な考察を行いたい。そして、受容を支えた奏者たちの証言から、マスランカ音楽の深い解釈の可能性を探っていきたいと考えている。

註

- 1 日下瑤子。「D. マスランカのサクソフォーン観に関する一考察 -吹奏楽のための交響曲における使用の検討を通して-」。『音楽研究 大学院研究年報 第三十二輯』国立音楽大学大学院（2020年3月）：225-238頁。
- 2 雲井雅人の発言。日下瑤子。「マスランカとの素晴らしき邂逅」。雲井雅人サクソ四重奏団のアルバム『雲井雅人サクソ四重奏団 バスト』の楽曲解説より引用。ブックレット所収、7頁。CAFUA CACG-0302, 2020年発売。CD。
- 3 Nathan Keedy, "An Analysis of David Maslanka's Chamber Music for Saxophone." D. M. diss., University of Northern Colorado, 2004. ProQuest (3139612).
- 4 Camille Louise Olin, "The Sonata for Alto Saxophone and Piano (1988) By David Maslanka: An Analytic and Performance Guide." D. M. diss., University of Georgia, 2006.

- 5 日下「D. マスランカのサクソフォン観に関する一考察 -吹奏楽のための交響曲における使用の検討を通して-」: 225-238頁。
- 6 日下瑠子。「D. マスランカ作品におけるコラル旋律の引用 -サクソフォン四重奏曲を例に-」。『音楽研究 大学院研究年報 第三十一輯』国立音楽大学大学院 (2019年 3月): 53-69頁。
- 7 2020年 8月。
- 8 “David Maslanka” Accessed August 3, 2020. <http://davidmaslanka.com>
- 9 “NAXOS MUSIC LIBRARY” <https://ml.naxos.jp>
- 10 “Apple Music” <https://www.apple.com/jp/music/>
- 11 “amazon music” <https://music.amazon.co.jp>
- 12 “Spotify” <https://www.spotify.com/jp/>
- 13 “ALL MUSIC” <https://www.allmusic.com>
- 14 “TOWER RECORDS ONLINE” <https://tower.jp>
- 15 1920年設立。
- 16 1981年にイギリスのマンチェスターで創設された吹奏楽のための国際組織。2年に1度、ヨーロッパ、アメリカ、アジアを巡回する形で大会が開催される。
- 17 オランダのケルクラーデで4年に一度開催される。
- 18 サクソフォン関連は全部で35枚あり、うち協奏曲6枚は吹奏楽としてカウントしている。
- 19 Choral (合唱)、Early (古楽)、Ensemble (合奏)、Instrumental (器楽)、Orchestral (オーケストラ)、Vocal (声楽)、Miscellaneous (その他)。
- 20 Peter J. Rabinowitz, Review of *Hiller, Yttrehus, and Maslanka*, by Barney Childs, Phillip Rehfeldt, *Fanfare-The Magazine for Serious Record Collectors* 05, no.3 (1982).
- 21 James H. North, Review of *Emblems*, by Cincinnati Wind Symphony, *Fanfare-The Magazine for Serious Record Collectors* 15, no.4 (1992): pp. 418-419.
- 22 James H. North, Review of *UConn Premieres*, by University of Connecticut Symphonic Wind Ensemble, *Fanfare-The Magazine for Serious Record Collectors* 17, no.2 (1993): pp. 313-314.
- 23 William Zagorski, Review of *Maslanka: Symphony No. 2: Laudamus Te; Hell's Gate*, by University of Arizona Wind Ensemble, *Fanfare-The Magazine for Serious Record Collectors* 22, no.6 (1999).
- 24 Robert Carl, Review of *David Maslanka: Symphony No. 5*, by Illinois State University Wind Symphony, *Fanfare-The Magazine for Serious Record Collectors* 25, no.6 (2002): p. 248.
- 25 Walter Simmons, Review of *Maslanka: Symphony No. 7*, by Illinois State University Wind Symphony, *Fanfare-The Magazine for Serious Record Collectors* 31, no.5 (2008): p. 287.
- 26 Merlin Patterson, Review of *David Maslanka: Unending Stream of Life · David Maslanka: Concerto for Trombone and Wind Ensemble Symphony No. 8*, by Illinois State University Wind Symphony, *Fanfare-The Magazine for Serious Record Collectors* 33, no.3 (2010): p. 207.
- 27 James A. Altena, Review of *Roy Magnuson: Seeking. Seeking. David Gillingham: Summer of 2008: David Maslanka: Symphony No. 3*, by Illinois State University Wind Symphony, *Fanfare-The Magazine*

for *Serious Record Collectors 34, no.3* (2011): p. 326.

- 28 James A. Altena, Review of *Wind Band Masterworks, Vol. 5*, by Texas A&M University Wind Symphony, *Fanfare-The Magazine for Serious Record Collectors 35, no.3* (2012): pp. 153-154.
- 29 David DeBoor Canfield, Review of *David Maslanka: Symphony No. 9*, by Illinois State University Wind Symphony, *Fanfare-The Magazine for Serious Record Collectors 36, no.3* (2013): p. 308.
- 30 David DeBoor Canfield, Review of *Starry Crown*, by University of Texas Wind Ensemble, *Fanfare-The Magazine for Serious Record Collectors 37, no.5* (2014): p. 100.
- 31 David DeBoor Canfield, Review of *Into Xylonia*, by Iridium Quartet, *Fanfare-The Magazine for Serious Record Collectors 38, no.5* (2015).
- 32 James A. Altena, Review of *High Upon the Eastern Hill* by Mansfield University Concert Wind Ensemble, *Fanfare-The Magazine for Serious Record Collectors 40, no.5* (2017): p. 455.
- 33 David DeBoor Canfield, Review of *The Return*, by University of Nevada, Las Vegas Wind Orchestra, *Fanfare-The Magazine for Serious Record Collectors 40, no.6* (2017) : p. 106.
- 34 Stephen K. Steele. Note for *Child's Garden of Dreams Sea Dreams Concerto for Two Horns & Wind Ensemble*. Illinois State University Wind Symphony, conducted by Stephen K. Steele. Albany 1579, released 2015, CD.
- 35 James Undercofler. Note for *Eastman American Music Series Volume 2*. Albany TROY 236, CD.
- 36 Camille Louise Olin, "The Sonata for Alto Saxophone and Piano (1988) By David Maslanka: An Analytic and Performance Guide." D. M diss., University of Georgia, 2006. p. 58.
- 37 優勝は Susan Jennings、2位はKevin Stewart。ファイナル審査課題曲のマスランカ作曲のソナタは、ローラ・ハンター（79年学部卒、80年修士卒）が中心となってNorth American Saxophone Allianceによって委嘱された。審査員はナショナル・シンフォニーオーケストラのヴァイオリニストAndreas Makris、サクソフォニストReginald Jackson、デイヴィッド・マスランカ。
- 38 2000年にリリリースされたSteven Jordheimの*Music of David Maslanka*. Albany TROY392に収められている「Sonata for Alto Saxophone and Piano」は1993年6月にローレンス大学で録音された。
- 39 Camille Louise Olin, "The Sonata for Alto Saxophone and Piano (1988) By David Maslanka: An Analytic and Performance Guide." D. M diss., University of Georgia, 2006. pp. 60-61.
- 40 Kenneth Tse. 筆者によるメールでのインタビュー。2020年12月21日。
- 41 Transcontinental Saxophone Quartetによって委嘱された「Mountain Roads (1997)」とともに1998年11月にローレンス大学で初演。
- 42 Steven Jordheim. 筆者によるメールでのインタビュー。2019年10月6日。
- 43 このうち1曲は編曲作品。
- 44 1973年にJoseph E. FischhoffがFischhoff National Chamber Music Associationを設立し、その後開催されるようになった。2020年で47回目となる。管楽器部門、弦楽器部門のそれぞれがジュニアの部、シニアの部に分かれ、ジュニアの部は18歳以下、シニアの部は35歳以下の年齢制限がある。ジュニアの部は、少なくとも10分の審査映像を提出すること、演奏曲は少なくとも2つの対照的な楽章を含むことが求められ、映

像審査を突破した団体は、演奏審査では異なるスタイル、もしくは時代から2曲、そのうち対照的な3つの楽章で計20分のプログラムを用意する。シニアの部は、少なくとも20分の審査映像を提出すること、演奏曲は少なくとも2つの対照的な曲を全曲演奏することとされ、演奏審査では異なるスタイル、もしくは時代から少なくとも2曲、計60分のプログラムを用意する。シニアの出場者の多くはアメリカの大学のサクソフォン専攻の学生である。

- 45 メンバーは、ソプラノ・サクソフォン 佐藤渉、アルト・サクソフォン Kimberly Finke、テナー・サクソフォン John O'Brien、バリトン・サクソフォン Morgan Bugbee。
- 46 テナー・サクソフォンと弦楽四重奏のための *Heaven to Clear When Day Did Close* (1981)、*Sonata for Alto Saxophone and Piano* (1988)、アルト・テナー・バリトン・サクソフォンと吹奏楽のための *Hell's Gate* (1997)、サクソフォン四重奏のための *Mountain Roads* (1997)。
- 47 メンバーは、ソプラノ・サクソフォン Johnny Salinas、アルト・サクソフォン Sean Hurlburt、テナー・サクソフォン Luke Gay、バリトン・サクソフォン Zachary Pfau。
- 48 Sean Hurlburt。筆者によるメールでのインタビュー。2020年9月12日。
- 49 David DeBoor Canfield, Review of *Migration* by Fuego Quartet, *Fanfare-The Magazine for Serious Record Collectors* 43, no.1 (2019).
- 50 *David Maslanka: Concerto for Trombone and Wind Ensemble Symphony No. 8* と *David Maslanka: Unending Stream of Life* の2枚。
- 51 Merlin Patterson, Review of *David Maslanka: Concerto for Trombone and Wind Ensemble Symphony No. 8* and *David Maslanka: Unending Stream of Life*, by Illinois State University Wind Symphony, *Fanfare-The Magazine for Serious Record Collectors* 33, no.3 (2010): p. 208.
- 52 日下。「D. マスランカのサクソフォン観に関する一考察 -吹奏楽のための交響曲における使用の検討を通して-」: 230頁。